

フィリピンのスカイランド 高原リゾート バギオ

「バギオ物語」第2回

戦前のバギオに生きた邦人写真師 古屋 正之助 (ふるや・しょうのすけ)氏 ～アギナルド将軍とも親交～



『比律賓年鑑』(昭和14年版)より

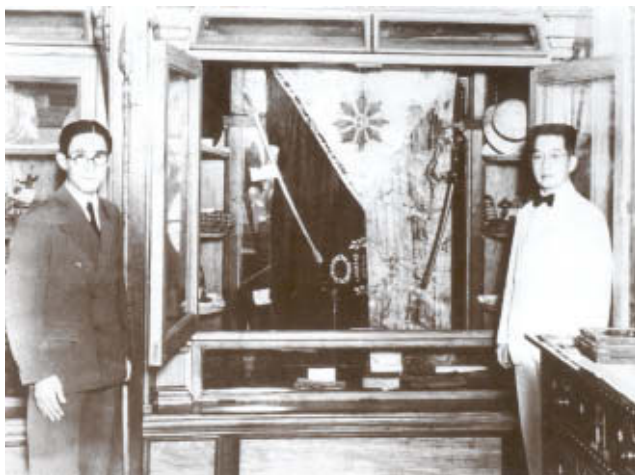
明治30年に単身渡比、フィリピン大学
芸術科で学ぶ

ルソン島北部の高原都市バギオ。戦前、この町の中心をゆるやかに下るセッション・ロードの中ほど、カルデロン通りとの交差点に、店構えの大きな2階建の「ジャパニーズ・バザー(1912年創業)」があった。「バザー」は今でいう百貨店であり商社であった。バギオで最大といわれたこのバザーには、写真館「パイン・スタジオ」が併設してあった。パイン・スタジオはセッション・ロードに誕生した最初の邦人経営の写真館で、当時最新といわれた機材を揃え、衣装や舞台背景画もバギオ風からヨーロッパ風までを用意していた。

この写真館で写真部長をしていたのが古屋正之助氏(1897-1964)だった。古屋氏は1897

バギオの写真館「パイン・スタジオ」で写真部長に

写真術を身につけた古屋青年はやがてバギオに移り、ジャパニーズ・バザーの写真館パイン・スタジオの写真部長に迎えられる。これはバザーの二代目店主、早川豊平氏が同じ山梨県人であったことが縁となった。外地では同郷人の結束は特別に強かった。早稲田大学を卒業後に渡比した早川氏は、敗戦までバギオ日本人会(戦争中は「北部ルソン日本人会」に改組)の会長を務めるなど、在留邦人からの信望も厚かった。古屋青年もその後、日本人会青年団長、さらに顧問になって活躍することになる。1932年(昭和7年)、日本から英子さんを迎え結婚する。その頃のバギオ市内の風景や新婚生活やアギナルド将軍のことを書き留めた英子さんの手記がある。



アギナルド邸を訪問時の古屋氏(左)と将軍(1933年)。展示の左のサーベルと国旗は独立革命の記念品。右の日本刀は訪日した際、明治天皇から賜ったとされる。

年(明治30年)、山梨県に生まれ、1918年(大正7年)2月に21歳で渡比、マニラ市ダスマリニャス通り(サンタ・クルス教会近く)の写真館「サン・スタジオ」に助手として就職した。サン・スタジオは邦人経営で「東洋一」といわれたほどマニラで名が通っていた。館主・山本鶴次郎氏は山口県出身で19歳の時に単身渡比し、一代で大写真館を築いた立志伝中の人だった。向学心に燃えた古屋青年は1921年(大正10年)、仕事のかたわらフィリピン大学の芸術科に籍を置き、芸術としての写真を学びつつ技術を磨いた。

私が比律賓ルソン島の北部にあるバギオ市に嫁いだのは昭和7年7月であった。全市、花でうずめられ素晴らしく美しい市であった。(中略)結婚2ヶ月後、主人のよき友人としてのアギナルド将軍から招待状がとどき、マニラ市外のカピテの豪邸に招待されたのである。豪華なサロンで将軍夫妻とともに素晴らしい食卓についた。(中略)

さて私は昭和8年11月に長男(英之助)を生んだ。ノートルダム教会の経営するフランス系の病院で看護婦たちは全部フランス人のマドレ(シスターつまり尼さん)たちであった。将軍夫妻はマニラから250キロもあるバギオの病院までお祝いにきて下さったのである。病院では大騒ぎであった由。(中略)

将軍は長男の小さな頭をなでながら「日本の天皇は一人の強い男子をお望みになられたのであろう」と主人に話されたとのことである。そしてしばらくスペイン語で話し合ってから、長男に「ロドルフォ・フランシス」と、私に「メリー・ルイス」というフィリピンネームを名付けて下さったのである。(『集録「ルソン」』)

アギナルド将軍やキリノ氏との親交

一邦人写真家に過ぎなかった古屋氏とフィリピン革命の指導者で初代大統領であったアギナルド将軍(1869-1964)との親交はどのようにして生まれたのであろうか。家族に対しても口数は少ない方で、戦後も若い頃の自慢話はほとんどしなかったため、親交の理由やきっかけは今もわからない。ただ当時、その卓越した撮影技術は社交界で話題になりつつあり、タガログ語、英語、社交界の言葉であったスペイン語までが達者だったので、その語学力をもって広く信望をあつめていたことは事実だった。渡比後に就職したマニラの写場サン・スタジオにはおそらく、フィリピン要人が出入りしており、その中にアギナルド将軍もいたのであろうか。当時のフィリピンでは写真家の社会的地位が高く「アーティスト(芸術家)」として尊敬されていた。長男の英之助氏(75歳、横浜市在住)は生前の母からこんな話を聞いている。あるとき撮影した人物写真が返却されてきた。理由は「アーティスト・フルヤ」のサインが入ってないから、というものであった。郷里の山梨の親戚に郵送した写真の中にはアギナルド将軍といっしょに撮った写真が含まれている。なお将軍以外にも、戦後第2代大統領になるキリノ氏とも親交があったようだ。1955年(昭和30年)、キリノ氏は大統領退任後に来日し東京の帝国ホテルに滞在した際、厳しい要人警護のなかを古屋氏と面会している。

古屋青年がパイン・スタジオにいる頃、南洋協会の商業実習生としてジャパニーズ・バザーに派遣されていた郡司忠勝氏は、「忘れられぬ人たち」として古屋家のことを振り返る。

フィリピン大学の芸術科に籍を置いていたという古屋正之助さんは痩せ形で、頭髪には白髪が混っていた。面長の顔には度の強い黒縁の眼鏡をかけ、その奥に優しい眼があった。歳のはなれた若い奥さんの英子さんは日本人としては均整のとれた、珍しいほど洋服が似合う、化粧の美しい人である。父に似た顔立ちの長男の英之助ちゃんと三人暮らしで、休日にはピクニックに出かけていた。(中略)地元の人やマニラからの避暑客にも評判がよかったし、日曜、祭日などは山奥から出てきた禪(ふんどし)と腰布を巻いたイゴロット族の女で賑わっていた。古屋さんは芸術家肌の人で口数は少なかったが、欧米人や蛮族の差別なく、優しい態度で接したのでパイン・スタジオと名付けられたこの写場はなかなかの繁盛ぶりであった。古屋さんは写真を通して多く

の友人や知人を持ち、後日独立してバラトック金山で写場を経営した。(『思い出はマニラの海に』)

バラトック金山に「ゴールデン・ライト・スタジオ」を開いて独立

古屋氏は1933年(昭和8年)頃、パイン・スタジオから独立しバギオ市の西南16キロにあるバラトック金山で「ゴールデン・ライト・スタジオ」を開く。バラトック金山は当時、約5000人の坑夫が働くバギオでも最大級の鉱山町で、スタジオは金山を経営する鉱山会社の職員や家族で賑わった。スタジオの壁には「鉱山王」といわれたジョン・ハウザーマン社長の写真もかけられていた。長男の英之助氏もこの鉱山町に住んでいた。バギオ市内の日本人学校の寄宿舎生活で、週末のみバラトックに帰っていたと話す。

古屋氏は本業のかたわら、北部ルソンのイゴロットと呼ばれる山地民の生活に深い関心を寄せていた。バラトックから北方のコルディエラ山系の奥地への踏査を試み、人類学的にも価値のある山地民の日常生活や風習の記録写真を残した。一方、「古屋白夢」のペンネームで著述活動も行った。その中でも注目されるのはベンゲット道路と日本人労働者についての考察「バギオ邦人今昔物語」(昭和10年『比律賓在留邦人商業発達史』南洋協会所収)だ。これは当時の日本の外交資料や英文献、工事従事者の口述などを元に事実を客観的に記述した最初の資料として後世の研究者の間で高い評価を得ている。



バギオ時代の家族の写真(1940年)。長男英之助君(前)と次男の正夫君

した最初の資料として後世の研究者の間で高い評価を得ている。

平和だったバギオの生活

『比律賓年鑑』には、昭和13年当時のバギオ日本人会の会員数は約320名、日本人小学校の生徒数は高等科と尋常科あわせて152名とある。非会員会わせると1000余人の邦人が住んでいた。生活基盤を整えた日本人移民は妻や家族を迎えるなどし、邦人数も徐々に増えつつあった。長男・英之助氏によると戦前のバギオでは「比較的豊かな邦人の家には電気調理器や冷蔵庫、手動脱水機のついた洗濯機まであった。バギオの上空を旋回する遊覧飛行もあった。空から見るとバギオの町は赤・白・黒の3色、赤は屋根、白はコンクリートの舗装道、黒が松林だった。また映画『風と共に去りぬ』(1939年公開)は小学校時代すでにバギオで上映されていた」と話す。戦前のバギオは宗主国アメリカの下、物質的にも文化的にも内地より潤っていたといえる。



早川豊平日本人会長(左)と古屋氏。

日米戦の戦場となったバギオ、そして敗戦と共に終わった邦人社会

しかし、この平和な生活は長くは続かなかった。1941年12月8日午前9時、海軍の真珠湾攻撃から数時間後、台湾を発進した陸軍の爆撃機がバギオ市郊外のジョン・ヘイ米軍基地を奇襲した。あっという間の出来事だった。この日を境に、平和なバギオの町は戦争色に染まっていく。

バギオに軍政を敷いた日本軍は兵力増強のため邦人青年と日系二世に現地徴兵を課した。古屋氏は軍属として軍政監部北部ルソン支部(バギオ)に勤務することになる。いやおうなしの戦争協力だった。敗色濃くなると、山下奉文率いる日本軍5万と在留邦人約3000人はルソンの山岳地帯に逃げ込んだ。バギオの在留邦人もその中に混じっていた。退路を断たれ、食糧補給がない自活戦で、山中では体力のない婦女子からまず倒れていった。

郡司忠勝氏は、敗走途中のルソン島北部の村で、バザーの支配人であり日本人会長であった早川豊平氏に偶然会った。かつての背広姿とは違い、カーキ色の服に巻き脚絆、戦闘帽をかぶった早川氏は初老の人ように疲れた表情で、同じく兵隊の鉄帽をかむった郡司氏をじっと見つめた。「懐かしさをとおこして見つめ合った目に涙が浮いた」。早川氏は終戦を前にした8月10日、56歳の若さで奥地



戦前に古屋氏の写真館があったバラトック金山跡。現在も古びた飯場らしき木造家屋が数棟あり人が住んでいる。20世紀の初めに採掘を開始し、戦前には沢山の日本人が暮らしたこの金鉱山は1992年、廃坑となった。1990年バギオを襲った大地震で地下坑道が浸水するなどして操業不能となったからだ。この廃坑跡は今、坑道内をトロッコで回り、金の採取を実体験する「坑道ツアー」が観光名所となり人気を呼んでいる。

の溪谷で亡くなった。

沢山のバギオの邦人と日系人が、山中で命を落とした。生き残った者は米軍の捕虜となり日本に強制送還された。邦人の財産は没収され、かわりに反日感情と怨嗟が残った。帰国できなかった日系二世はその中に取り残された。ベンゲット道路工事完成から約40年後、苦勞して築き上げたバギオの邦人社会はこうして終わった。

戦犯容疑で収容所に拘禁、アギナルド将軍が助命

古屋氏一家は父と母子が山の中で極限状態の中をなんとか生き延び、家族全員が帰国を果たすことができた。

古屋正之助氏は1946年(昭和21年)1月8日、リパティ船で帰国し、郷里の山梨で先に帰った家族と落ち合う。しかし幸福もつかの間、3ヶ月後の4月に突然、戦犯容疑で巣鴨に連行され、翌月には米軍機でフィリピンに移送されマニラ郊外カンルーバン収容所に拘禁された。当時、いちど戦犯になれば助命嘆願は困難で「日本人10人の証言よりフィリピン人1名の証言が勝る」といわれていた。古屋氏の潔白を説明したのはアギナルド将軍だった。米軍司令部は将軍からの連絡に驚いた。直ちに古屋氏を喚問した。戦犯容疑は完全な人違いで同姓の憲兵隊通訳の人物に間違えられていたことがわかった。「自分が戦犯ということは絶対にあり得ないと思っていた。戦争中フィリピン人をいじめたことなどない。逆に助けたんだ。帰国した後、家族にそう語った。古屋氏は戦後、横浜の写真スタジオに勤務したが、1964年(昭和39年)12月7日、心不全で68年の生涯を閉じた。

かつての「バギオ・ボーイ」、長男英之助氏は父と同じ写真家で、日本での仕事引退後は、生まれ故郷のバギオと日本を往復する生活を続けている。今年9月のバギオ市政100周年に合わせ、約3年前から市内を歩き回り、1から101の数字を題材に撮った写真の個展を開くなどしながら、懐かしい少年時代のバギオの風景や、死んでいった同級生、戦前のバギオ邦人の思い出を集めている。(橋本信彦)



長男、古屋英之助氏。バギオ市内の「アボン」(北ルソン比日友好協会)にて愛犬プロッサムといしょに(2008年9月)

《参考文献》

『Japanese Pioneers in the Northern Philippine Highlands』(北部フィリピン高地の日本人開拓者)(Filipino-Japanese Foundation of Northern Luzon, Inc. 2004)
『集録「ルソン」』(佐藤喜徳編集 比島文庫)
『思い出はマニラの海に』(郡司忠勝著 三月書房 1993年)
『比律賓年鑑』(大谷純一編 昭和14年版)

「バギオ」の地名はどこから？

『フィリピン事典』には「バギオ」は「苔を意味する『ビギウ』に由来する」とある。「ビギウ」は地元のイバロイ人の言葉である。「ビギウ」は話し方により「バギウ」と聞こえることもある。

この苔あるいは水生シダが群生していた場所は、現在のバギオ市の北西、ラトリニダッド町に入る手前の低地、ギサッドの谷に当たる。当時のギサッドの川辺には西方の川筋からイバロイ人の家族が移り住み一つの集落をなしていた。「ギサッド」はイバロイ語で「丘から降りてくる」という意味の言葉「キサッド」から来ている。当時のギサッドの中心には隣町のラトリニダッドにあったスペイン軍司令部の出張所があり、少なからずスペイン人もいた。この場所に「バギウ」と呼ばれる水生植物が群生していたことから、いつの間にかこの名がついた。スペイン人はこれを「Baguio」とつづった。しかしこの時期はまだ、「バギウ」は谷筋のごく狭い地域を指すにすぎなかった。

ときに「バギオ」の地名は「暴風、台風」という意味のスペイン語「バギオ(baguio)」からきたと説明されることがある。確かにバギオは雨や台風が多い。しかしもともとは地名の「バギウ」の方が先にあっただろう。どうも順序が逆である。地名にあてたつづり字の「Baguio」が、その後ど

のようにしてスペイン語の台風の意味になったかは不明だ。この「Baguio」はフィリピン諸島だけで使用されたスペイン語だ。

この「バギウ」が、現在の広い地域の総称となるきっかけは、イバロイ人の指導者、マテオ・カリニョ氏が一族と村人を率いてギサッドの谷から丘の上に集団移住したことだった。軍の出張所も共に移った。「カフグワイ(広い場所)」と呼ばれていたこの新しい住み場所は、現在のバギオ市役所からバーナム公園にかけてのあたりだ。新しい居住地に移ってからも「バギウ」の地名はそのまま残り、時代を経てより大きな町の地名として定着していった。フィリピン諸語では母音の「ウ」と「オ」の区別が厳格でない。いつの間にか「バギウ」より「バギオ」が一般的となった。これが地名「バギオ」の由来のようだ。

カリニョ氏はその後指導力を発揮、家畜の放牧地を拓き井戸を掘って灌漑を施すなど一帯の開発に貢献した。それから十数年経った1909年、「バギオ」には市政が敷かれ、周辺に町が拡大してバギオ市として発展することになる。バギオに通じるベンゲット道路工事(1905年開通)に従事した日本人移民の一部がバギオに残り、邦人社会の礎を築くのもこのころであった。

北ルソン日本人会

Japanese Association in Northern Luzon (JANL) (小国秀宣代表)

c/o Sato Kokusai Learning Centre Inc Patria De Baguio Rm.203, Session Rd., Baguio city 2600, Philippines Teleax: (074) 424-0288
e-mail: janl-baguio@mbe.nifty.com http://janl.exblog.jp/10/

バギオ100年祭に向けて取り組む
邦人団体

Information

ジャコウネコの糞から採取される「アラミド・コーヒー」の店

マニラ首都圏マリキナ市のリバーバンク・モールに野生のジャコウネコの糞から採取される通称「アラミド・コーヒー」を出す喫茶店「コルディリエラ・コーヒー」がある。

より独特の香味が加わるともされている。コーヒーの栽培農家の人たちが日の出前にその糞を拾い集めて水洗いし、乾燥させたものを業者が買い取り焙煎する。これらは全て手作業となる

ため量産ができない。ここ「コルディリエラ・コーヒー」ではアラミド・コーヒーは「カベ・ムサン」という名前で販売されている。1杯360ペソ。店のオーナーのフランクさんは英国人で、カリンガ州出身の奥さん、グレースさんといっしょに2003年からこの事業を始めた。アラミド・コーヒーの一大産地である北部ルソンのコルディリエラ(スペイン語で「山脈」という意味)地方の名をとり店の命名をし



Cordillera Coffee: A1-30, G/F Arcade, Riverbanks Center, 84 A. Bonifacio Road, Barangka, Marikina City Tel. 933-8040 営業時間: 朝6:30~深夜0時

ジャコウネコは熟したコーヒーの果肉部分が好物らしく夜間に木に登り果実を食べる。しかし固い豆の部分のみ未消化のまま排泄される。その豆はジャコウネコの腸内で発酵することに

「カベ・ムサン」とある。一般にフィリピンではジャコウネコのことを英語でシベット・キャットと呼んでいるが北部ルソンの山中では「モティット」、ミンダナオでは「パロス」、またインドネシアでは「ルワック」と呼んでいる。フィリピンでは森林伐採が進んだため数が減少し、今では希少動物となっている。

一般に「アラミド・コーヒー」と呼ばれているこのコーヒー、フィリピンでは地域により呼び方が異なる。「アラミド」はタガログ語で「ジャコウネコ」という意味で、このため「カベ・アラミド」と呼ばれることもある(「カベ」は「コーヒー」の意味)。タガログ語には別の呼び方「ムサン」がある。喫茶店「コルディリエラ・コーヒー」のメニューには

この「世界で最も高価なコーヒー」として知られているアラミド・コーヒー、フィリピンにいるあいだに一度、味わってみるのもいい。コーヒー豆は360ペソ(25グラム、カップ3杯分)で販売されている。通常の焙煎コーヒーにはアラビカ種の豆を使っている。バギオのSMシティ・バギオにも支店がある。